

高坂正顯著「カント解釋の問題」

淡野安太郎

何であらうか。

「カントはまことに奇しき運命をもつた哲學者である。曾てカントは自然科學の認識論的基礎附けに不滅の金字塔をうち立てると共にその反面に於ては先行形而上學を完膚なきまでに粉粹した人として定評があつた。ところが近來 *Metaphysiker* としてのカントといふやうなことが少しも不思議に思はれず語られて居る。此の調子で行くと近い將來には *Mystiker* としてのカントといふやうなものも或は出て來ないとは限らない。」これは數年前ベルリン大學で「カント哲學」を講じたシュプランガー教授の口から劈頭先づ逆り出た得意の諧謔である。しからばカント解釋をして時代と共に再出發させるものは

第一にそれはカント自身が豫備學としての「批判」を書いたのみで、出來上つた形に於ける體系を提供しなかつたことに基づくことは云ふ迄もない。即ち、何等かの程度に於てカントを超えて *hinübersetzen* することなしにはカントの理解が成立し得ないといふところに、種々なるカント解釋の生れる可能性が横たはつて居るのである。しかし單にそれのみでは時代の關心をカントに迄つれ戻す積極的な理由とはならないであらう。哲學の再出發が要求される時少くともその出發點としてカントが人をひきつけるのは、第二にカントが飽くまで健全なる常識の立場を見失つて居ないからであらう。即ち、一足飛びに理性を *erschaffen* せずして先づ經驗の中には

たらく有限なる人間悟性からはじめて序々に *der natürl-lichen Fortschritt der menschlichen Erkenntnis* の線に沿うて進むところにカント哲學の超時代的な健全さがあつたのである。

しかし吾々には既に長年月に亙るカント研究の歴史が興へられて居る。幾多先人の並々ならぬ努力の結果としてカント研究史上確固たる地歩を占める諸解釋を充分顧慮しつつ、健全なるカントを全面的にわれわれと共に生かすことは勿論容易なことではない。しかも此の至難なる仕事が高坂正顯氏によつて成しとげられ待望の「カント」(西哲叢書) が遂に公にせられたことは、我が學界にとつて大きな喜びであると共に誇りであると言はねばならぬ。此のまことに劃期的な名著は、しかし、決して短時日の間に成つたものではない。「私がカント哲學の研究をはじめてからもうかれこれ二十年にもなる」といふ言葉を以てブルーノー・バウフはその著「イマースエール・カント」の序文を書き起して居るのであるが、高坂氏も恐らくそれに似た感慨を懷かれることであらう。而

して西哲叢書の「カント」に次いで公刊された「カント解釋の問題」は即ち氏の多年に亙る眞摯なカント研究の中から殊に特色のある、しかもカント解釋上原理的な意味をもつ三つの論文を撰んで纏められたものに外ならぬのである。

二

第一の論文「實驗的方法としての超越的方法」が發展されたのは今からいへば既に十年前、ハイデッカーの *Krauthuch* 未だ現はれず、新カント派のカント解釋が壓倒的であつた頭のことには屬する。そのころ一般に先驗哲學といふ名のみを以て呼ばれて居たカント哲學の方法を實驗的方法として解しようといふ高坂氏の主張は、恐らく可なり奇異に感ぜられたことであらう。しかしそれは決して奇を好んで異説が提唱されたのではない。新カント派の色眼鏡をはづして——ここに高坂氏の非常な卓見がある——ありのままのカントに親しく接するならば、カントが實にはつきりとその實驗的方法を繰返し述べて

居るのが見出されるのである。しからば所謂實驗的方法とは何を意味するのであらうか。カントに依れば幾何學や物理學が學として確實な路を歩み得るやうになつたのは、その對象を眺め對象から受け入れたものによつてではなく、むしろ理性が先天的な概念に從つて對象の中へ投げ入れ、*hineinlegen* 考へ入れ、*hineinlegen* た質問に、對象をして具體的に答へしめる實驗によつて、はじめて「學」が成立したのである。かくの如く、受け入れの方法に代ふるに投げ入れの方法を以てしようとする思考法の變革こそ、眞にコペルニクスの轉回の名にふさしいであらう。といふのは、不動の中心と考へられてゐた地球を天體の間に巡行せしめようといふのがコペルニクスの試みに外ならぬからである。(此の場合コペルニクス的といふ形容詞は、業績をではなく方法を特色づける言葉として解されねばならぬ)。かかる意味に於ての實驗的方法、即ち理性の計畫を對象の中に置き入れることによつて對象の理性的な性質を見出す方法を哲學に適用し、「純粹理性の實驗」*Experiment der reinen*

Verunft を試みたのがカント哲學に外ならぬが故に(批判的方法と稱せられるものもその實際の使用に於ては實驗的方法を用ひて居るのである)、その超越的方法は極めて適切に實驗的方法と呼び換へられることが出來、且つまた實驗的方法として理解された超越的方法にとつては「範疇の妥當は經驗の存立に俟ち、經驗の可能は範疇の適用に俟つ」といふ所謂超越的演繹論の避け難き循環なるものも何等脅威とならない所以を、高坂氏は明快に論斷されて居るのである。

右の如く超越的方法を實驗的方法として解釋することによつて却つて歴史的なカントに忠實であり得ることを第一の論文に於て示された高坂氏は第二の論文「物一般と意識一般」に於ては、その實驗的方法を以てカント自身に向ひ、カントに於て“*überhaupt*”の領域は最も抽象的なる物一般から最も具體的なる意識一般にいたる野を蔽ふものとして、逆にいへば、徹知的なるもの一般を最深の地盤とし次いで純粹なるもの一般の層を重ね遂に經驗的なるもの一般にまで發展する構造的關聯を示す

のではないかといふ假説を立て、物一般・對象一般・直観一般・經驗一般・意識一般などの「純粹理性批判」に於ける用語例を實に克明に検討されつつ、カント自身をして右の假説に答へしめられて居るのである。一般に、考へることが聲なくして語ることである以上、思想の理解は語る言葉の正確な把握なくしては不可能であり、このことは古典の場合には當然のこととして常に綿密な文獻學的研究を基礎として立論されるのが普通であるが、近代のものを取扱ふ場合にはその言葉の親近性のために往々ないがしろにされ勝ちであり、そのために眞に個性的な生きた考へ方を或は殺し或は見逃すことも決して稀ではない。(私は嘗てカントの或る譯書の中で極めて普通に用ひられた *aufhoben* といふ言葉が止揚すると譯されて居るのを見て愕然としたことがある。) カント研究史上前人未踏の新領野を開拓された高坂氏の焔眼に衷心より敬服する所以である。

この第二の論文は——第一の論文が近代的なカントを際立たせて居るのに對して——どちらかといへば古典哲

學との傳統の上に於けるカントを示して居るのであるが、これらの要素がどのやうな割合で配分されるかを決定するために、カント哲學の全體がどのやうな點に歸着するかを明かにしたものが「經驗の形而上學と形而上學の形而上學」と題する第三の論文であつて、これによつて三つの論文は單なる論文集の體裁に於てではなく一冊の書物の三つの章として纏められて居るのである。

三

本書を通讀して何よりも先づ感ぜられることは、行論に少しの無理もなく極めて素直にして着實、しかも無限の背後から來る智慧の光に對象の全貌がその隅々に至るまで實によく照し出されて居ることである。まことにカントをいかに解するかは、その人がいかなる人であるかによるのであらう。本書に論ぜられて居る限りのことに關しては、私は異議を挟むべき餘地を寸毫も見出し得ないのである。ただ——本書に於て示されて居るものは高坂氏が最初立てられた計畫のほんの一部分であつて、此

の種の文獻學的研究を積み重ねてカントの全體に迫つて行きたいといふのが氏の本願であるとはいへ——氏の大體の意向は三つの批判書を内面的に照し合はせることによつて或は少くとも批判期のものによつてカントを解釋しようとして居る様であるが、果して批判期のもののみを克明に研究することによつて歴史的なカントに忠實になり得るかどうかといふことになれば、問題はおのづから別である。而して、まさに此の點にカント解釋上一つの根本問題があるのではないかと私は考へるのである。

凡そ人間の才能に天才型と努力型とがあることは一般に認められるところであるが、天才型に對する努力型の長所は *mancherley Unklypungen* にも拘らず終始一貫一つの目標に向つて邁進するところにあり、その短所は粒々辛苦の後ひとたび或るシェーマをもつにするや否や、飽く迄そのシェーマを固執して時には明かに無理と思はれる場合にも千遍一律に敢てそれを押し通さうとするところにある。従つて、かかる努力型に屬する人の本

質をその生き生きとした貌に於てとらへるためには、出來上つたものの克明な分析のみならず、それが出來上る途中——*in the making*——のものをそのなまなましい姿に於て把握することが必要である。哲學者の中ではカントやヘーゲルなどは蓋し努力型の典型的なものであるが、三十七歳の時に「精神現象論」を書いたヘーゲルに比べるならば、五十七歳に至つてやつと「純粹理性批判」を著したカントの場合には、一層右の注意が肝要なものではないかと思はれる。更に不幸なことには「純粹理性批判」の出来る前にあの有名な十二年間の沈黙の期間があり、それがまことつつけの *Dark-change* の役割を演じてともすれば誇大な割の効果を齎しがちである。しかし事實は、先批判期から批判期へかけての連續的な發展の中に於てこそ、生きたカントが捉へられ得るのであるまいか。否、更に一步を進めて、從來我國の西洋哲學研究に於ておのづからしきたりとなつた觀のある主著主義とも呼ばるべきものは、今日既にその制限が反省さるべき時期に達して居るのではないかと私は考へる

のである。

これに對し、西洋哲學を西洋哲學として研究するのが目的ではない、などと尤もらしいことを言ふ勿れ。心を空しうして歴史に忠實であることによつてのみ、過去は眞に現在に生き現在を豊かにすることが出来るのである。若し性急に獨創性を自負し自らにとつて興味のあるもののみを先哲から汲みとらうとするならば、それは畢竟既に自己のもてるものを先哲の思想の中へ讀み込むに過ぎないこととなり結局なものをも學び得ない結果となるであらう。かゝる意味に於ても、高坂氏がその堅實無比な文獻學的研究によつてありのままのカントに直接觸れる途を示されたことを、私は限りなく意義深きことと信ずるのである。